

解体新書～医学の発展に貢献した人々～（社会科）

対象：小学校6年以上

1 主眼

杉田玄白たちに「解体新書」を著すことを決意させた腑分けをどのような人がしたのかを調べる場面で、実際に解剖をした老人の優れた技術や知識について資料をもとに考えることを通して、差別されてきた人々である老人の優れた技術や知識が、日本の医学の発展に貢献していたことを考えることができる。

2 本時の位置

前時 蘭学や国学について調べたことを発表し合い、「ターヘルアナムトミア」の翻訳をはじめとした新しい学問が日本の発展に重要な役割を果たしたことを学んだ。

3 人権教育の視点

○差別されてきた人々が医学の発展を支えたことを理解する。（知識的側面）

○差別されてきた人々が自分の仕事・役目を誠実に果たそうとしていた心情を想像できる。（技能的側面）

4 指導上の留意点

○「老人は、なぜ優れた技術や知識を持っていたのか」等の疑問が出た場合には、死牛馬処理の中で、腑分けの技術を獲得したことや内臓配置の知識を得たことを伝える。

5 展開

段	学習活動	予想される児童の反応	指導・助言	時	資料	
導入	1 解体新書が果たした役割と玄白たちの努力について想起する。	<ul style="list-style-type: none"> ・解体新書によって正しい知識が広がった。 ・日本の医学が進歩した。 ・蘭学に対する関心が高まり、蘭学を受け入れるようになる人々が増えた。 ・玄白たちは苦勞してもあきらめずに翻訳をした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習を想起して日本の医学の進歩に重要な役割を果たしたことを確かめる。 	5	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の掲示物 ・解剖図 2枚 	
展開	<p>2 玄白たちは、いつ、どうして翻訳しようと思ったのだろう。</p> <p>3 解剖をしたのは誰だろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・解剖を見学した時、オランダ語の解剖図の正確さに感動して翻訳しようと思った。 ・解剖を見学した時、そのころ使われていた解剖図が間違っていたことがわかったから。 ・玄白たち ・（百姓や町人とは別に身分上）きびしく差別されてきた人 ・玄白たちじゃないの？ ・玄白たちより詳しい人がいるの？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・苦勞しながらもあきらめずに根気強く翻訳をやり抜くきっかけとなった腑分けの見学に着目できるように資料を提示する。 ・玄白たちと考えている児童が多いと思われる。「見学した」という言葉と「解剖の様子（想像図）」から、実は、そうではないことに気づかせたい。 	7	<ul style="list-style-type: none"> ・解剖の様子（想像図） 	
	学習問題	「解剖」をしたのは、どのような人物なのだろう。				

	4 腑分けをしたのはどんな人だろう。	<ul style="list-style-type: none"> ・虎松の祖父。90歳。 ・若い時から腑分けを何度か行っている。 ・玄白たちが知らない心臓、肝臓、胃等の内蔵のことを知っていた。 ・玄白たちに内臓の名前を教えている。 ・ターヘルアナトミアにかかれていることを知っていた。 ・優れた技術を持った人だ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料「腑分けの名手」を配付し、玄白が書いた「蘭学事始」の腑分けの一節であることを伝える ・「腑分け」とは、その当時の「人体の解剖」を指す言葉であることを伝える。 ・玄白たちが老人をどう見ていたのか問う。 	25	<ul style="list-style-type: none"> ・資料1「腑分けの名手」 ・資料2「翻訳の決意」
まとめ	5 優れた技術を生かして玄白たちに知識を伝えている老人の果たした役割について考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・玄白たちは体の中の様子がオランダの解剖書と同じだと驚いていた。老人は、それまでの解剖図の間違いを示し、玄白たちに正しいことを教えている。 ・老人の優れた技術や知識が玄白たちの書いた「解体新書」の原動力になっている。 ・玄白たちがもし老人の腑分けを見ていなかったならば、解体新書は本当にできていなかったかもしれない。老人の知識や技術が日本の医学の発展に貢献している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「優れた技術を生かして玄白たちに知識を伝えている老人は、どんな役割を果たしたのかな。また、玄白たちにどんな影響を与えたと思いますか。」と発問する。 ・児童の発言から、老人が当時の医者である玄白たちでも知らない優れた知識や技術を持ち、解体新書の翻訳の原動力になって、日本の医学の発展に貢献したことを確認する。 	8	<ul style="list-style-type: none"> ・学習カード

(『同和問題学習展開案』(長野県教育委員会)より)

【参考】

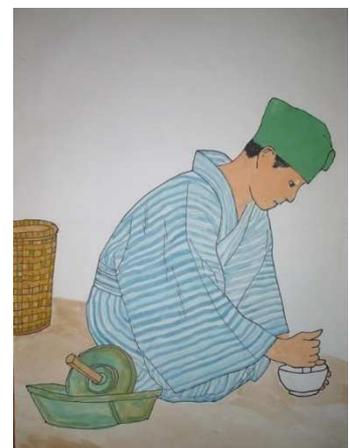
○学習の導入の教材として、レンブラント作「トゥルプ博士の解剖学講義」(博士が腕の解剖をしながら講義をしている絵)を使う実践もあります。

○資料「腑分けの名手」には、「とても元気な老人」とありますが、玄白は「健やかなる老者なりき」と記しています。「健やかなる老者(老人)」を手がかりとして学習を進める方法も考えられます。

○けがれ意識についての学習とあわせて、「なぜ、玄白は自ら解剖をしなかったのか(できなかったのか)」について探っていく学習の流れがあります。(けがれ意識について、『あけぼの 人間に光あれ』P106.107にわかりやすい説明があります。)



○薬屋や医者が全国各地の被差別部落にいたことが明らかになっており、DVD『誇りうる部落の歴史』にも登場します。補充資料として使うことができます。



【資料1】

ふわ かいぼう 腑分け（解剖）の名手

1771年の春のことでした。わたしは、オランダ語で書かれた『ターヘルアナトミア』という医学書を手に入れることができました。わたしはもちろん一文字も読むことはできなかつたのですが、図にかかれています、内臓、骨格のぐあいなどが、今まで見たり聞いたりしたものとはたいへんちがってましたので、これは一度、身体内部を実際に見てみたいものだと思います。

すると、奉行所より、「明朝、骨が原にて腑分けを行うので、希望があればおいでください。」との知らせを受け取りました。わたしは、翌朝、友人である前野良沢、中川淳庵をさそい、ともに骨が原に向かうことになったのです。

さて、腑分けのことは、虎松という者がすぐれていると聞きましたので、たのんでおいたところ、その日はあいにく急病で、代わりにその祖父である90歳ぐらいの老人が腑分けを行うことになりました。とても元気な老人で若いときから腑分けを何度か行つたと話してくれました。

その日も、老人は、あれこれと指し示しては、「これは心臓でございます。そして、これは、肝臓、これは胃であります。」などと説明してくれました。また、「これは名前は知りませんが、自分は若い頃から数体を手がけておりましたところ、これは必ずこの場所にあります。」などと言って、わたしたちに示してくれました。

わたしたちは、手に持っていたオランダの解剖書とてらしあわせてみたところ、一つとしてその図とちがっているものはなく、まったく同じであることにおどろきました。

『蘭学事始』 杉田玄白著・片桐一男全訳注 講談社学術文庫刊)

【資料2】

ほんやく けつい 翻訳の決意

帰り道、わたしは前野良沢まえのりょうたくや中川淳庵なかがわじゅんあんと語りあいました。

「今日の腑分けふわは本当におどろくことばかりであった。かりにも医者いしゃを仕事としてい
る者が、その医学の基本である人体の本当の姿を知らずにいたことはたいへん面目めんぼくな
いことである。この『ターヘルアナトミア』を少しでも翻訳ほんやくすることができたならば、
きっと身体からだの内外のことが多くの人にはっきりとわかって、治療ちりょうに役立てることがで
きるであろう。なんとかしてこれを翻訳ほんやくしたいものである。」

わたしの言葉に二人とも「まったく同感である。」と言い、さっそく3人で翻訳ほんやくの
作業にとりかかることになりました。

（『蘭学事始』杉田玄白著・片桐一男全訳注 講談社学術文庫刊）

※優れた技術を生かして玄白たちに知識を伝えている老人は、どんな役割を果たしたと
思いますか。
また、玄白たちにどんな影響を与えたと思いますか。